Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-04-09

六甲山における近代登山の受容 : 毎日登山から捉える「山」への認識

荒武, 叶子

(Citation)
兵庫地理,65:37-52

(Issue Date)
2020

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90007183

兵庫地理 65（2020）37-52

六甲山における近代登山の受容
―毎日登山から捉える「山」への認識―

荒武　叶子

Ⅰ.はじめに

1）研究の背景

日本の森林面積は国土の 67％と世界の中でも高い[1)]。山林が生活の身近にある日本では、古来万葉集の時代より四季の折々の山の風景が詠まれてきた。さりとて山に入る行為のうち、いわゆる登山という行動は、近代まで余暇活動として一般的ではなかった。大正時代に登山家の藤木九三[2)]が、兵庫県姫路市北部の雪彦山（せっぴこさん）に登った時のエピソードがある。

> 雪彦山の登路開拓に初めて出かけたとき、山麓の村で子盗り（ことり・子供を誘拐して売りとばす）と間違われて大騒ぎになった。変な大きな布袋を背負うた胡散臭いのが村に潜入したから子供を戸外にだすな！こんな山中に用のあるよそもんは、山師か犯罪者以外に考えられない……という訳らしく、えらい目に逢いましたよ（津田 1978）

「こんな山中に用のあるよそもんは、山師か犯罪者以外に考えられない」という反応から、山に入る行為への認識が、今とは全く異なると理解される。近世以前、山に入ることは、修験道などの信仰や、食料や燃料などの生活の糧を得るといった目的を持つ行為であった。対して、現在の娯楽やスポーツとしての「登山」は、明治初期に西洋から伝わった近代登山を指す。近代登山とは「信仰のためでも生業や職務のためでもなく、遊びあるいはスポーツとして山に登り、それを楽しみ、価値を見出す活動」（布川 2015）である。藤木九三の話は、雪彦山の近隣の村人が抱いた、近代登山に対する不信感や衝撃性を伝えている。登山ひいては山への認識は、明治以降に大きく変わって来たと言える。

2）先行研究

近代登山、もしくは山への認識をめぐる先行研究は、体育学や観光学、地理学で蓄積されてきた。ただし、その多くは宗教的登山や教育としての学校登山が研究対象であった。井村（2006）は日本における野外教育の源流を探り、卯田（2015）は大正時代の比叡山鉄道敷設に対する、延暦寺の取り組みを調査した。これらから、在来の登山と近代登山は切り離された関係ではなく、信仰登山が近代登山の基盤となり、時には対立関係にあったことが分かる。しかし、近代登山が「子盗り」の言説にある「胡散臭」さを乗り越え、普及する過程は言及されていない。

この問いについて、近代登山と同じく明治に伝来した、様々な近代スポーツの既存研究を参照してみると、まず体育学の渡辺（1993）は学校組織による野球の開始から、全国大会の開催に至る過程を追った。地理学の佐藤（2003）はヨットクラブの地理的伝播を、会員の社会属性や社会的背景から明らかにしている。しかし、これらの競技は日本に存在しなかった道具を使用するため、登山のように行動や場所自体に、認識変化が起こったとは考えづらい。その点を分析しているのが、地理学の小口千明である。小口（1985）は明治 10 年代の海水浴の受容過程を探った。初期の海水浴の目的は病気の治癒で、冷たい海水に身を浸す冷浴と、海水を温めてから入る温浴の 2 通りがあった。温浴の存在により、海水浴は湯治の一種とみなされ、意識の上では湯治－海水温浴－海水冷浴という連続性をもって受容されたという。つまり、海水浴受容の特徴は、従前あった湯治の方法に新しい行為を沿わせる点にあった。

また、登山は中島（2014）で位置づけられているように、近代スポーツの中でも徒歩運動に属する。その徒歩について、地理学の森正人が近代の四国遍

路を検討している。四国遍路は空海への信仰を基盤とするが、教義も厳密な宗教的意義もなかった。ゆえに1920年代、交通機関の発達とともに娯楽産業に取り込まれ、それを批判する形で、徒歩巡礼を正当とする遍路団体が生まれた。1930 年代後半以降は、ガソリンの供給事情や健全な身体の育成などの軍事的事情のもと、徒歩の質素倹約の精神が一層強調され、国家イデオロギーに流用されていった（森 2015）。森は、四国遍路が様々な主体にその価値を発見され、利用される様子を紐解くことで、身体運動が単なるスポーツや娯楽以上の意味を持ちうるという視点を示している。

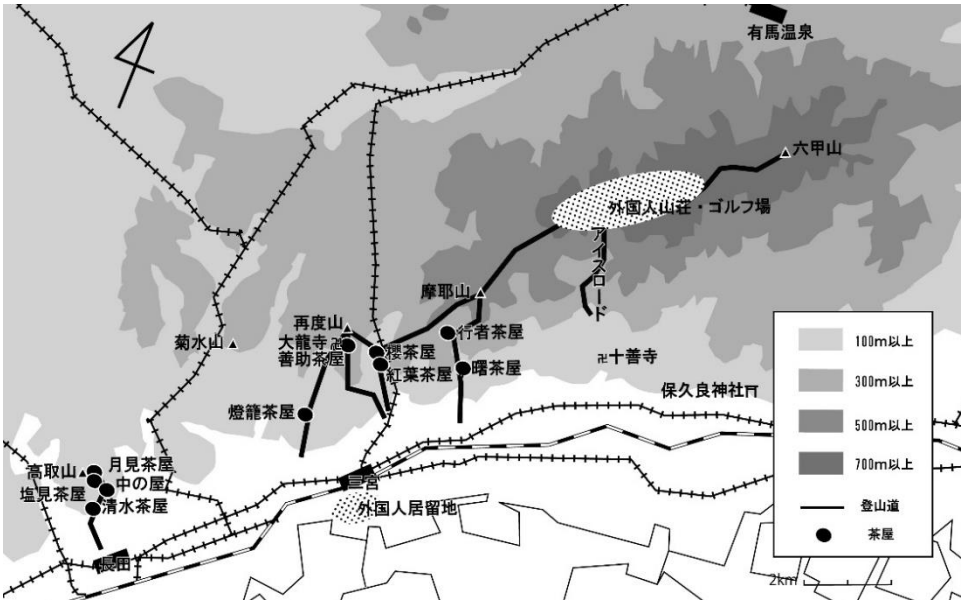
3）本稿の目的

以上の先行研究を踏まえて、本稿では「胡散臭」くも見られた近代登山の、日本における受容と定着を考察する。具体的には、社会状況に留意しつつ、いつどのような主体により、登山の価値が発見されていくのかを検証する。

近代登山は近代以降に新しく「山」という空間に持ち込まれた身体行動である。そのありようを検討することで、最終的には日本人の山への認識変化を論じられると予測する。また、近代登山は徒歩運動でもある。もしも、森（2015）で浮彫りにされたような、国家イデオロギーとの結びつきが明らかになれば、身体運動と政治性の分野に新たな事例を加えることになるだろう。

対象地は兵庫県の六甲山[3]に設定する（第1図）。選定理由は次の二つである。まず六甲山は、開港都市として栄えた神戸の市街地に隣接しており、一説には「近代登山発祥の地」と称されるほど、全国でも早期に近代登山が根付いた（高木 2006）。そのため、近代登山導入の検証に適する。次に、六甲山では「毎日登山」という固有の登山[4]が広く行われているからである。毎日登山は、出勤・通学前の早朝に登山し、指定の署名簿に記帳して、その回数を競うものである。毎年秋に神戸市が、優秀な成績の登山者を表彰しており、2018年には2万3千回もの記録が打ち立てられた[5]。神戸市には数多くの毎日登山団体があり、最盛期には平日1万人ともいう人々が登り、現在も約2,500人が毎日登山を行っている。

なお本稿で注目するのは、特に明治後期から昭和10年代の六甲山登山である。この時代は六甲山で近代登山が始まり、登山者数が急増する。第2章では、毎日登山の前提となる近代登山が生まれたヨーロッパと、日本国内の登山史を概観する。第3章では明治後期の外国人による六甲山レジャー開発の様子と、レジャーとして登山が日本人に受容される過程を分析する。第4章では、大正時代後期から第二次世界大戦前にかけての、毎日登山の変容を考察し、第5



第1図　対象地概要図

現在の地図上に大正時代から昭和10年代の主な登山道と茶屋の位置を示した。

章で全体をまとめる。

Ⅱ. 近代登山の潮流

本章では、対象地における分析に入る前に、前提となる近代登山史を整理する。

近代登山はアルプス山脈で始まる。イギリスでは、18 世紀半ばからの産業革命によって、上・中流層の暮らしが豊かになる。しかし都市では、急速な人口増加による生活環境の悪化が起こった。上・中流層は郊外へと移住し、その郊外生活の中で、明日の労働のために必要な心身の回復として、レクリエーション（余暇）を確立していった。例えば、スポーツ、自然旅行などで、夏の間は標高の高いアルプス地方にでかけるようになり、氷河見物や山麓の散策が行われた。さらに 1840 年代には、スイスに鉄道が敷設され、移動時間と費用の両面が大幅に削減されたことも、アルプス登山の興隆に拍車をかけた。

ヨーロッパで誕生した近代登山は、明治時代に日本に持ち込まれた。明治 10 年代には科学者や技術者らが、山での調査や観測を始めた。

余暇活動やスポーツとしての「近代登山」の勃興は明治 20 年代からで、その引き金となったのが志賀重昂『日本風景論』(1894) である。欧米流地理学に基づいた新しい風景論を通して、国土愛を謳った『日本風景論』は、日清戦争中のナショナリズムの高揚と相まりベストセラーとなった。この本をきっかけに 1905（明治 38）年、日本初の山岳団体である日本山岳会が設立された。

大正時代に入るとハイキングのような低山の登山も盛んになり、第二次世界大戦前まで大衆登山ブームが起こった。その要因は、5 万分の 1 地形図が 1913（大正 2）年から発売され、大衆向けの山岳雑誌や観光パンフレットなどが多数刊行されたことや、経済成長によりレクリエーションが発達したことであった。本稿が対象とする六甲山における近代登山は、登山としての難易度から大衆登山に位置づけられる。

Ⅲ. 六甲山における登山の誕生

本章では、大衆登山ブームの少し前の時代、明治後期の六甲山に焦点をあてる。居留地外国人によるレジャー開発の様子、そして週末レジャーとして登山がどのように日本人に受容されるのかを分析する。

1）居留地外国人による六甲山のレジャー開発

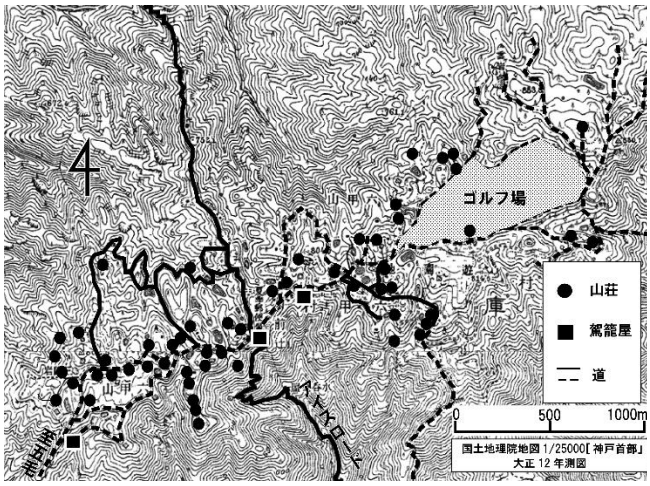
明治初頭の六甲山には、御影の漁師が有馬温泉に鮮魚を運ぶための魚屋道と、大阪堂島の米相場を丹波へ連絡するための旗振り台のほかは、採取した氷を運ぶためのアイスロードしかなく、麓の住民がたまに草木・鳥獣を得るために出掛けるぐらいのものであった（山と渓谷社 2001）。

1910（明治 43）年頃、六甲山上には、イギリス・ドイツ・アメリカ人などの別荘が 60 戸以上並ぶ別荘地が形成されていた。その先駆けとして 1895（明治 28）年 3 月六甲山の山野 1 万坪を借り、三国池の近くに山荘を建てたのが A.H. グルームである。彼は「六甲山の開祖」と呼ばれ、六甲山レジャー開発の立役者と言われる（棚田ほか 1984）。グラバー商会に勤務していたグルームは、21 歳の時に出張員として開場したばかりの神戸居留地に異動した。その後、貿易会社を経営していたが、1895（明治 28）年に「六甲山を阪神の軽井沢にしよう」と山荘の建築に取り掛かる。

さらに 1901（明治 34）年 5 月、日本で最初のゴルフコースが 4 ホールで誕生する。腰の高さまで生い茂る雑草や竹の根、岩などを手作業によって取り除く開拓であったため、開場まで 3 年の歳月がかかったという。1903（明治 36）年には日本初のゴルフ倶楽部である神戸ゴルフクラブ（KGC）が、A.H. グルームらによって創設され、翌年には 18 ホールに拡張された。ゴルフコースが完成し、別荘が立ち並んだ頃には、外国人にとって六甲山は、余暇活動の場と認識されていた。ところが、グルームは六甲山で登山を行うことはあまりなかったと思われる。それは、自宅から山上の別荘に行く際の移動方法にある。「身長 1.90cm〔ママ〕、体重 90kg もの豊かな彼は 3 人曳きの人力車に乗って布引街道をのぼり、青谷の旧坂を下って五毛天神前で下車する。そこに待っている特別仕立ての横田与吉の駕籠に乗て山路を登って行った」（棚田ほか 1984）。この山荘行きの駕籠屋は、他の外国人も多数利用したようで、第 2 図を見ると

山荘の並ぶ道沿いに駕籠屋が点在している。

六甲山における登山勃興に大きくかかわるのは、KGC のメンバーであり倶楽部一番の名手であった H.E. ドーントである。次節ではドーントが設立する外国人主体の登山団体の活動と、日本人主体の登山活動を比較し、その相違点を探っていく。



第 2 図　外国人山荘と駕籠屋（明治 30 年代後半）

『六甲山の地理　その自然と暮らし』より筆者作成。

2）週末レジャーから毎日登山へ

1897(明治 30)年頃に神戸に来た H.E. ドーントは、神戸ゴルフ倶楽部ができると「ドーントロック」という山荘を持ち、KGC 入会翌年の 1905（明治 38）年には倶楽部で主将を務めるほど（棚田ほか 1984)、ゴルフに打ち込んでいた。しかし、ゴルフ場は 11 月末から 3 月の冬季は雪や霧のため閉鎖される。1907（明治 40）年ごろから、この閉鎖期間に週末・祭日を利用した六甲山での山歩きに精力的になり、明治後期には登山集団 The Mountain Goats of Kobe（M.G.K）を組織した。日本語で神戸カモシカ倶楽部[6]と訳されるこの団体は、大正初期に全盛期を迎え、機関紙『INAKA』を 1915（大正 4）年から 1924（大正 13）年にわたって、18 巻刊行した。

第 1 表は M.G.K の活動日を示しており、冬季のほぼ毎週の土曜・日曜日、または祝祭日[7]に山歩きが行われていると分かる。M.G.K のメンバーは朝 8 時から 9 時ごろに出発し、夕方 4 時、5 時頃に帰途につく。もしくは山荘（ドーントロック）に泊まって帰ることもあり、時には「高貴なお鬚連中」という愛称で呼ばれた数匹の犬を連れて歩くこともあったようである。また、その運営に着目すると、『INAKA』は全巻がドーントの編集であり、食事などの提供もドーントらの個人所有の施設で行われていた。役員・会計などを置く「クラブ」とは、違う毛色をもった団体であったと考えられる。ゆえに、ドーントが神戸を去ると同時に、会は消えてしまう。会員は、ほとんどが外国人で日本人は 2 人しか所属しておらず（布川 2015：84)、会員向け機関紙である『INAKA』の価格は 5 円から 7 円 50 銭であった。これらのことから、M.G.K は富裕な外国人らの同好会のような集まりであり、その活動は丸一日をかける週末レジャーの様態であったと推測される。

第 1 表　M.G.K の活動日

1913/11/29	（土）	1914/2/1	（日）
1913/11/30	（日）	1914/2/7	（土）
1913/12/6	（土）	1914/2/8	（日）
1913/12/13	（土）	1914/2/11	（水）
1913/12/14	（日）	1914/2/14	（土）
1913/12/20	（土）	1914/2/15	（日）
1913/12/21	（日）	1914/2/21	（土）
1913/12/25	（木）	1914/3/1	（日）
1913/12/27	（土）	1914/3/8	（日）
1913/12/28	（日）	1914/3/14	（土）
1914/1/1	（木）	1914/3/15	（日）
1914/1/2	（金）	1914/3/21	（土）
1914/1/3	（土）	1914/3/22	（日）
1914/1/4	（日）	1914/3/28	（土）
1914/1/5	（月）	1914/3/29	（日）
1914/1/11	（日）	1914/4/3	（金）
1914/1/17	（土）	1914/4/5	（日）
1914/1/18	（日）	1914/4/10	（金）
1914/1/24	（土）	1914/4/11	（土）
1914/1/25	（日）		

『プレイランド六甲山史』より筆者作成。

その M.G.K が活動を始めた 3 年後、あるいは日本山岳会設立から 4 年後でもある 1910（明治 43）年 11 月 19 日に、神戸における日本人による初めての登山会、神戸徒歩会が結成された。設立・運営ともに日本人が主体であったが、会員の中には、H.E. ドーントなど、M.G.K に所属する外国人が賛助会員として多数入会していた。外国人の数は 1914(大正 3)年時点で総会員数 155 人中およそ 36%にあたる 56 名を占めていた。そのため、神戸徒歩会の活動は居留地外国人による、初期の六甲山登山の影響を少なからず受けていると考えられる。

1913（大正 2）年 10 月当時の、神戸徒歩会の活動目的を示した会則が以下である。

第 2 条　本會ハ土曜日（午後 1 ジ。）日曜日或ハ祭日ヲ選ビ毎月 1・2 回、主トシテ神戸市背山ノ山野ヲ跋渉シ勝地ヲ探リ半日或ハ1日ノ清遊ヲ試ミ、以テ登山趣味ヲ涵養シ心身ノ練磨ニ質スルト同時ニ、一般登山者ノ便宜を計ルヲ以テ目的トス

「本会ハ土曜日（午後1ジ。）日曜日或ハ祭日ヲ選ビ毎月1・2回」、または「半日或ハ1日ノ清遊ヲ試ミ」から、当初の活動日や時間は、M.G.K と同様だと分かる。さらに、「一般登山者ノ便宜を計ルヲ以テ」は、当時の主要な活動内容[8]の一つであった山路の新設や修繕を指す。神戸徒歩会は外国人会員の会費を山路工事に当てており（『ペデスツリヤン』，第 85 号，1926 年 10 月 10 日）、1914（大正 3）年から 2 年間のうちに、2,441 円もの大金を費やしている。当時の 1 円は現在の貨幣価値のおよそ 1,027 倍[9]であったことから、その力の入れ具合が感じられるが、これは会の創立者が、外国人らが六甲山上で路をつくる犠牲的な精神に感激したからだという（中島 2016）。開催日程のみならず、活動内容も M.G.K をなぞらえるものであった。しかし異なる点もある。「心身ノ練磨ニ質スル」という目的は、M.G.K には認められないため、日本人に受容される際に付与された、登山に対する新たな意味付けであると考えられる。

設立当初の神戸徒歩会は、開催日・時間・活動内容は外国人の週末レジャーに類似したものであったが、登山の目的には新たな意味が付与されていた。ただし、この時はまだ「毎日登山団体」としての活動はほとんど見ることができない。

次に、毎日登山がいつ行われるようになったのかを知る手掛かりとして、大正時代に神戸で発生した登山団体の会則、広告文などから、団体の目的を抜き出した（第 2 表）。すると、1916（大正 5）年あたりまでの団体は「日曜祭日を利用」して、「登山趣味を涵養し」たり「清遊を試み」たりしている。これらの団体は、休日を利用した遠足を活動の主軸に置いており、毎日登山は「毎日登山部」という形で、団体の中に一つの部として設けられていた。これは神戸徒歩会と同じく、M.G.K の活動の影響を受けており、外国人の行った週末レジャーに近い形であったと考えられる。

しかし、少しずつそのあり方に変化が起こってくる。1918（大正 7）年あたりから団体の目的に「体育奨励」や「心身練磨」という言葉が使われるようになる。それと時を同じくして、多くの団体では目的の達成のため、毎日登山に活動の軸を置き、遠足が付随的な位置になってくる。毎日登山の特徴の一つでもある署名簿は、外国人たちが置いていたのをまねて、1920（大正 9）年に神戸徒歩会も設置した。1923 年（大正 12）年 7 月 1 日からは神戸徒歩会に「毎日登山部」が設置され登山回数の記録と優秀者の表彰が始まり（『ペデスツリヤン』，第 57 号，1923 年 7 月 15 日）、その翌年には会則が変更された。

また、数ある毎日登山団体のいわば統合機関として、愛山協会[10]が 1923（大正 12）年 1 月 3 日に創立された。愛山協会は、各団体が独自に行っていた毎日登山の優秀者に送るメダルの統一を実施し、神戸裏山の愛護にも熱心に取り組んだ。実質どの程度の団体を愛山協会に組み込めたのか、詳細は定かではないが、毎年愛山協会主催で行われる新年連合登山団体の参加団体数は 60 から 90 団体であったため、毎日登山における一大派閥となっていたと推測できる。しかし、神戸徒歩会などの一部団体は入会しなかった。

これらのことから、毎日登山という新たな登山スタイルは、1918（大正 7）年から 1923（大正 12）年あたりで完成されたと言える。この時期を毎日登山形成期と本稿では呼ぶ。居留地外国人によって持ち込まれた近代登山が、日本人によって実践される中で、従来の登山にはなかった「体育奨励」や「心身練磨」などの意味が付与されつつ、次第に形を変えてできあがったのである。この毎日登山の誕生は、六甲山で近代登山が受容されたことを表す。

第２表　大正時代に創立した主な登山団体の会則

神戸徒歩会（KWS）	1913（大正2）年	第2条　本会ハ土曜日（午後1ジ）。日曜日或ハ祭日ヲ選ビ毎月1･2回、主トシテ神戸市背後ノ山野ヲ跋渉シ勝地ヲ探リ半日或ハ1日ノ清遊ヲ試ミ、以テ登山趣味ヲ涵養シ心身ノ練磨ニ質スルト同時ニ、一般登山者ノ便宜ヲ計ルヲ以テ目的トス	週末の登山とは別に毎日登山部を設けた団体
日本アルコウ会	1914（大正3）年2月	第1条　山岳秀麗ノ境ニ趣味深キ遠足ヲ試ミ身神ヲ練磨シ剛健潤達ノ気風ヲ興スヲ以テ目的トス。以上目的ノ實行ヲ容易ナラシムルノタメ毎月2･3回隔日曜日ニ僅少ナル費用ヲ以テ主トシテ近畿ノ山嶽ニ登リ其内1回ハ特ニ阪神手近ノ山野ヲ選ムモノトス。	
神戸野歩路会	1916（大正5）年10月	第2条　本会ハ会員相互ノ親睦ヲ旨トシ精神修養身体健康ヲ充足スル目的ヲ以テ、日曜祭日ヲ利用しシテ趣味深キ山嶽秀麗ノ境ニ清遊ヲ試ミ神社仏閣ノ歴史ヲ探ルニ遠足ヲ行ウ工程ハ会報ニテ通知ス、尚ホ毎日登山部ヲ設ケ心身ノ練磨ヲ図ルタメ再度山頂へ毎日登山ヲ行フ。	
神戸鶏鳴徒歩会	1918（大正7）年10月	1　徒歩ヲ以テ体育奨励ヲ目的トス 1　会員は毎朝4時30分迄ニ一定の場所ニ集合スベシ 1　徒歩時限ハ毎朝4時30分ヨリ6時30分迄トス	毎日登山を中心に時々遠足に出かけていた団体
神戸山岳友会	1920（大正9）年5月	第2条　体育奨励ヲ主トシ会員ノ身心向上ヲ発展センガ為メ社寺旧蹟ヲ探リ常ニ山野ヲ跋渉シ身体ヲ練磨シ以テ健全ナル国民思想ヲ喚起スルヲ目的トス 第6条　本会ハ其目的ヲ貫徹センガ為毎日布引山頂ニ至リ本会備付ケ署名簿ニ署名スルモノトナス	
神戸ヒヨコ登山会	1922（大正11）年10月	第3条　体育奨励ヲ主トシ常ニ山野ヲ跋渉シ名勝旧蹟ヲ尋ネ神社仏閣ノ参拝ヲ以テ身体ヲ練磨シ精神ノ修養ヲ図ルヲ目的トス 第4条　本会員ハ前条ノ目的ヲ達スル為メ日々左記へ登山備付ノ本会署名簿ニ署名スルコト	
ダイヤモンド登山会	1923（大正12）年5月	第1条　本会ハ登山体育ノ機関トシテ身体ヲ練磨シ彼我ノ親睦ヲ図ルヲ以テ目的トス 第3条　本会ハ第1条ノ目的を達スル為左ノ事業ヲナス 1、会員ハ日々布引、再度山、高取山ニ登山シシテイノ茶屋ニ備付タル本会署名簿ニ自署シ登山シタル事ヲ証明ス	
神戸徒歩会（会則変更）	1924(大正13）年	第2条　本会は休日を利用し山野を跋し或は勝地を探り清遊を試み以て登山趣味を涵養し、心身の練磨に質すると共に一般登山者の便宜を計るを以て目的とす。 第3条　本会ハ前条ノ目的ヲ達成センガ為ニ右ノ事業ヲ行フモノトス 5.毎日登山部設置	

『プレイランド六甲山史』『ダイヤモンドタイムス』より筆者作成。

また同時に、六甲山の場所の意味も変化してきたと推測される。明治初頭までの六甲山は、第１章第1 節でみた雪彦山の言説と同様に、特定の目的の他は立ち入られることのない空間であった。明治 20 年代後半に A.H. グルームらによって山荘やゴルフ場が並ぶレジャー空間へと読み替えられ、明治 30 年代後半から H.E. ドーントらが週末にハイキングをするようになる。そして明治 41 年に多くの外国人も所属した日本人主体の団体、神戸徒歩会が誕生した。神戸徒歩会が週末ハイキングを受容し、そこに「心身ノ練磨」という新たな意味が付与され、毎日登山の基礎となった。つまり小口（1985）の海水浴の受容過程とは異なり、六甲山における近代登山は日本人が一旦西洋の週末レジャーを取り込み、その実践の中で少しずつ毎日登山という独特の形が定着したと考えられる。ただし、週末レジャーから毎日登山が生まれたのであって、週末レジャーが毎日登山へと変化したわけではない。毎日登山が登場してからも、依然としてあるいはますます、週末などを利用した「遠足」や「例会」という形でハイキング

は盛んに行われ続けた。

Ⅳ. 毎日登山の発展と変化

1）毎日登山団体の盛衰

前章では週末レジャーであった登山から、毎日登山が生まれる過程を確認した。毎日登山は1915（昭和4)年には登山者が1万人となり(棚田ほか 1984)、「神戸市民の文化」と称されるまでに発展していく。本節では統計資料を中心に、大正時代から第二次世界大戦前までの毎日登山全体の盛衰や登山者の社会的階層を読み取り、その変化の概要を追う。

毎日登山団体について数の増減や登山者の社会的階層を知るために、『プレイランド六甲山史』、『神戸背山登山史』、『鶏鳴』記載の資料を1次資料として、団体名称・設立年・事務所の住所を抽出し、分類を行った。分類のカテゴリーは趣味的登山会、青年団系登山会、企業系登山会、宗教系登山会、民族系登山会の5つである。カテゴリーは団体の設立元の性格によって設定した。カテゴリーへの区分は表3のように、会の名称や事務所の住所、可能なものは他の資料からの情報をもとに行った。その結果、名称、設立年、事務所の住所などの詳細な情報が確認できる団体と、会の名称のみが記録に残り、大まかな設立年しか分からない団体に、大きく分けられた（第4表)。第4表でB、Cに区分した団体は、会の名称のみを頼りに判断したもので、全体の約72%である。一方、情報としての信頼性が高い、第4表のAの約28%の団体は、年ごとの設立団体数の変化とカテゴリーの内訳をグラフに表した（第3図)。

まず、毎日登山団体が何年にいくつ設立されたのかを示す第3図のグラフの、数の推移に注目する。すると、1920（大正9）年から1923（大正12）年あたりと1927（昭和2）年から1938（昭和13）年あたりに、2つの波が読み取れる。以降本稿では前者を第一波毎日登山、後者を第二波毎日登山と呼ぶ。

第一波の時期は前章で論じたところの、毎日登山形成期[11]と重なる。カテゴリー構成は、企業的登山会や青年団系登山会がいくつか存在しているが、計13件中8件が趣味的登山会で、第一波の6割以上を占める（第3図)。すなわち第一波毎日登山は、趣味的登山会の活動が目立つ。第二波は第一波に比べて期間が長く、毎年の設立数も比較的多いことから、毎日登山の規模自体もかなり大きくなっていたと推察できる。さらに、どのカテゴリーの団体も数件以上設立されているため、登山者の多様性が高く、様々な社会階層の人々が登っていたと言える。

次に、第3図のグラフに含めることができなかった、第4表のBとCも併せて参照する。BとCの構成比を見ると、Aに比べて情報不足であるため、その他扱いの趣味的登山会が多い。しかし、青年団系登山会に目を向けると、ある変化に気づく。第一波と重なるBの青年団系登山会は5 /55件（約9%）で、第3図の2 /24件（約8%）を合わせると、明治・大正時代の17年間に設立されたすべての登山会の約9%しかない。第二波と同時期のCにおける青年団系登山会は、54 /148件（約36%）で、第3図の12 /53件（約23%）を加えると、昭和の13年間に設立された登山会のうち約33%を占める。したがって実際の第二波の団体構成は、第3図から見えるものより、青年団系登山会の存在感が大きかったと推測される。

以上の数値データからは年ごとに何件の新しい登

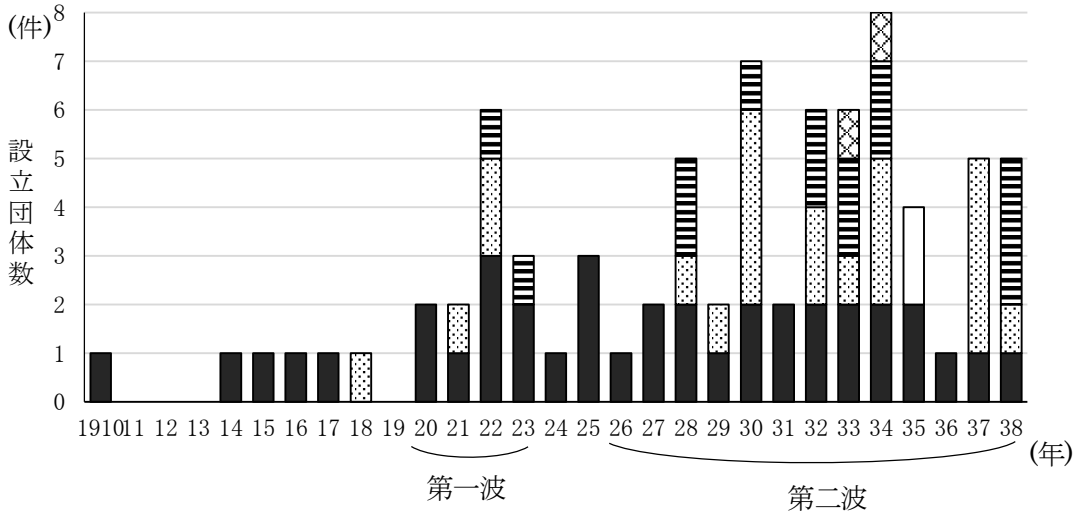
第3表　登山会分類の例

会の名称から設立元が分かるもの	鐘紡岳府山岳部	1922(大正11).11.3	林田区御崎町1丁目	
	上野青年団登山部	1928(昭和3).9.8	灘区福住通6丁目179　花牟礼方	
事務所の住所から設立元が分かるもの	神戸アノヤマ会	1922(大正11).11.18	湊東区東川崎町1丁目鉄道官舎23	
	大乗登山会	1934(昭和9).4.1	湊東区楠町2丁目　蓮照寺内	
他の資料から設立元が分かるもの	神戸武イ登山会	1935(昭和10).4.1	神戸区海岸通4丁目28　林方	
※上記に特に当てはまらないものは趣味的登山会とした	神戸ムスビ会	1927(昭和2).4.2	林田区梅ヶ香町1丁目171　前田方	

趣味的登山会
企業系登山会
青年団系登山会
宗教系登山会
民族系登山会

第４表　１次資料からの分類

								計
A	会の名称・設立年・事務所の住所が確認できる団体		38	21	14	2	2	77
B	会の名称は確認できる団体	1913（大正元）年～1926（大正15）年に設立	47	2	5	1	0	55
C		1927（昭和2）年～1939（昭和14）年に設立	76	17	54	1	0	148
							合計	280



第３図　明治から昭和初期の毎日登山団体の設立数

第４表の区分Ａより作成。

山会が設立されたのかが分かるが、各年に活動していた登山会の合計数、あるいは消滅した登山会について知ることはできない。しかしながら、以下の言説から毎日登山団体の運営の厳しさが読み取れる。

> 久しい不況は参加者及び入會者の減少を招來したとは云へ、（中略）かゝる時華やかな過去を顧りみて現座の登山會はげに孤影然としてその數に於ても堅實なるものを算ふなれば僅か十指に充たざる寂しさに（以下略）。（『ダイヤモンドタイムス』，第110号，1936：6）

1936（昭和11）年の言説であるが、会員数や登山会の減少に嘆いている。この年は第３図でも団体設立数が落ち込んでいるが、登山会の数は「僅か十指に充たざる」と、非常に少なかったようである。表４と第３図より1910（明治43）年から1926（大正15）年の17年間で79団体が誕生したが、『神戸背山登山史』によると、1925（昭和14）年に存在の確認できる明治・大正設立の団体は20件しかない（神戸市レクリエーション協会、神戸市民山の会 1970）。毎日登山団体は、会報の発行や毎日登山優秀者へ贈られるメダルなどで経費がかかり、会員集めに常に悩まされ淘汰されていく団体も少なくなかった。

第３章第２節では毎日登山が、1918（大正７）年から1923（大正12）年あたりに確立されていくと推察した。しかしそれ以降も、団体数や登山者の属性など、毎日登山の様子は激しく変化している。その要因は上記の引用文において「久しい不況は参加者及び入會者の減少を招來したとは云へ」という言説に読み取れるように、社会的動向との関係がうかがえる。そこで次節では社会的動向と毎日登山の関係性についてより詳細に分析する。

2）２つの団体誌から見る毎日登山の変化

a）分析資料の選定

本節では神戸徒歩会の会誌『ペデスツリヤン』と、神戸鶏鳴徒歩会の会誌『鶏鳴』の言説を用いた分析

を行う。毎日登山のありようを質的な面から分析し、前節で生まれた新たな問いである毎日登山と社会的動向の関係性について考察する。最盛期には1万人の登山者を有した毎日登山は、登山に対する考え方や目的、意義なども個人間や団体間で多様だったと思われる。そこで毎日登山全体の方向性を論じるには、大きな派閥の動向を比較することが有効と考えた。数ある団体の中でも、2 大派閥と認められるのが、最も古株で登山道の整備を行い、六甲山の近代登山発展に大きく貢献したと言われる神戸徒歩会と、50 から 60 団体を束ねていた愛山協会[13]である。ただし今回は資料の都合上、愛山協会の会報などを参照することができない。代わりに愛山協会について、協会設立時から加盟し、協会の役員も輩出していた神戸鶏鳴徒歩会の会報を取り上げる。第5表のように両団体は人数的規模が同程度で、資料としても神戸徒歩会の『ペデスツリヤン』は 1923（大正 12）年から 1943（昭和 18）年、神戸鶏鳴徒歩会の『鶏鳴』は 1923（大正 12）年から 1940（昭和 15）年とほぼ同時期分の会誌が現存している。これら会誌は主に会員への情報共有や、他団体との交流に使われていたようで、紙面の多くは週末に行われる例会（遠足）案内や活動報告、あるいは会員からの寄稿文である。本稿の分析では毎日登山について言及している意見文や寄稿文を扱う。

第5表　神戸徒歩会と神戸鶏鳴徒歩会の概要

	神戸徒歩会（KWS）	神戸鶏鳴徒歩会
創立年	1910（明治43）年11月19日	1918（大正7）年10月17日
カテゴリー	趣味的登山会	企業的登山会
会員数	729名 ※1927（昭和2）年当時	最大700名以上 ※1923（大正12）年当時
会費	賛助会員：年間10円 正会員：年間5円 準会員（学生）：年間1円50銭	1924（大正13）年会費：1円80銭 1930（昭和5）年会費：1円20銭
会誌	『ペデスツリヤン』 1～2月に1度発行。	『鶏鳴』 1月に1度発行。
所属	所属なし。	愛山協会に最初期から所属。
活動範囲	設立当初は登山道の新設・整備を活動の主軸に、六甲登山の基礎を作った。 後に大阪支部も持ち、関東方面や海外にも足を延ばす。	支部などはないが、会内に多数の部活を持つ（野球部、園芸部、撃剣部など）。 例会（遠足）は関西近郊が多い。

b）第一波：毎日登山と郊外運動

まず第一波毎日登山のありようを見ていく。第一波は毎日登山形成期の 1918（大正 7）年から 1923（大正 12）年と時期的に重なり、主に趣味的登山会によって構成されていた時期である。1923（大正 12）年 8 月 15 日発行の神戸徒歩会の会報には以下の記事がある。

> 殊に我神戸竝に大阪市の如きは病菌の製造に最適なる朦々たる煤烟の所有者なり（中略）今や都市に於ける人類保健の唯一手段は「オゾン」の充溢せる林間生活山嶽跋渉に依りてのみ初めて眞純なる空氣と過激なる心神の疲勞を根底より醫し保健の眼目に到達する事を自覺するに至れり。（『ペデスツリヤン』，第 58 号，1923 年 8 月 15 日）

冒頭の「神戸竝に大阪市の如きは病菌の製造に最適なる朦々たる煤烟の所有者なり」に、当時の大阪や神戸における、すさまじい速度での工業発展による環境悪化の様子が表れている。このように前半部分で都会＝不健康が強く結びつけられている。後半では「今や都市に於ける人類保健の唯一手段は『オゾン』の充溢せる林間生活山嶽跋渉に依りてのみ初めて眞純なる空氣と過激なる心神の疲勞を根底より醫し」とあり、汚い都市と対照的な場所として「林間」が位置づけられ、登山をしてきれいな空気を吸うことで精神の健康がもたらされると説明している。

「不健康」な都会からの逃避は、明治時代後期から東京や大阪周辺で「郊外運動」として起こった。それはイギリスの産業革命後に作られた田園都市と同じく、都市生活者や会社員といった新中間層が「健康」を意識して都会から離れた場所に移住する動きであり、いくつもの郊外住宅地を形成した。阪神間でも 1904（明治 37）年から 1907（明治 40）年にかけて大阪の富裕層を中心に個人的なレベルでの郊外居住が始まり、1909（明治 42）年あたりからは阪急電車、阪神電鉄による大規模な郊外住宅地の開発が行われるようになった。しかしこの時代は職住近接が一般的であり、大阪で働く人々の移住を促し、乗客の確保をするために、郊外居住のすばらしさを謳う PR が開発に先駆けてなされた（第 6 表）。阪神電鉄

『市外居住のすゝめ』は当時の医療関係者の講演や論述を取りまとめた14稿からなる。記事のタイトル

第6表　鉄道会社による阪神間郊外住宅地の形成とPR

	阪神電鉄	阪急電車
1908年 (明治41)	小冊子 『市外居住のすゝめ』発刊	
1909年 (明治42)	貸家経営(西宮)から 住宅地経営を開始	・パンフレット『住宅地御案内 如何なる土地を選ぶべきか 如何なる家屋に住むべきか』発行 ・池田町で分譲住宅地経営開始。
1910年 (明治43)	鳴尾(西宮市)で貸家経営 (70戸)	
1911年 (明治44)	御影(神戸市)で分譲住宅 (19戸)	
1913年 (大正2)		月刊誌『山容水態』 発刊(1917年まで)
1914年 (大正3)	月刊誌『郊外生活』発刊 (1915年まで)	

は、「空気の善悪と市街居住の可否」「虚弱者は須らく市街居住を断行せよ」など、医学的な面から郊外居住の利点を強調している。阪急電車も、池田新市街の住宅地案内として啓蒙的なパンフレット[14]を発行している。冒頭には「美しき水の都は夢と消えて、空暗き煙の都に住む不幸なる我が大阪市民諸君よ！」とあり（「阪神間モダニズム」展実行委員会 1997)、大阪市の劣悪な状況を押し出すことで、郊外居住を勧めている。これらの郊外居住の宣伝と上記の神戸徒歩会の会報は、都会を不健康であるとし、医学的根拠をもとに郊外の利点を語っている点で類似する。そして、神戸徒歩会会員の社会階層は年会費からも窺えるように、比較的裕福な銀行員や貿易商など、新中間層の人々が多く所属していた。新中間層が郊外運動の対象とされた階層と近いことからも、第一波毎日登山には「健康」という郊外運動を背景とした意味付けが行われていると指摘できる。

不健康な都会からの逃避として郊外住宅地が設けられたが、そこでは住民により「新しい生活」が営まれた。「新しい生活」とは西洋文化を取り入れた近代的な生活である。山口（1987）によると、「新しい生活が本当に可能なのは、既成の市街地でなく、郊外に開発された新しい街において」であり、阪神間でも「阪神間モダニズム」と称されるカルチャーが形成された。「新しい生活」では余暇を活用した趣味が発展し、阪神電車が発行した冊子『郊外生活』[15]には「西宮に家庭農園の理想を行ふ紳士」(阪神電鉄, 1914年4月号: 14）といった園芸を中心とした、趣味を積極的に行う住民の日常が描かれている。このような園芸等の趣味について1926(大正15)年の『鶏鳴』にも以下の記事がある。

「鶏鳴園県下12名勝に当選す」
今ヤ其ノ完成ニ近キ鉄棒、ブランコ、辷り台等ノ運動器具ハ勿論撃剣ノ道具殊ニ菊ノ栽培ニハ造詣シタル腕ヲ発揮シ（以下略）(『鶏鳴』，第52号，1926年8月1日）

これは神戸又新日報主催の県下 12 名勝への当選を知らせる記事である。神戸鶏鳴徒歩会は布引山に「鶏鳴園」を開墾し、そこへ倶楽部ハウスを設置していた。園芸のための農作地も3つ所有して、会員に貸付ており、この記事以降、会報には鶏鳴園や菊栽培に関する記事が盛んに掲載される。また園芸以外にも、文章中にある「撃剣」部や野球部などが作られ、毎日登山や遠足にとどまらず、会の活動範囲は拡大していった。六甲山は、園芸やスポーツなどの趣味を行う場所となり、毎日登山は「健康」だけでなく、趣味としての側面も有するようになった。

上述のように、第一波の時期の登山は、「健康」に価値を置かれていた。それは不健康な都市から取り戻そうとする心身の「健康」であり、郊外運動に類似する文脈が認められる。さらに郊外運動で形成された住宅地では「新しい生活」が営まれ、登山も「趣味」としての意味を持つようになった。

c）第二波：毎日登山と軍事情勢

前項では第一波毎日登山が郊外運動を背景にして、「健康」や「趣味」といった価値が与えられていたことを明らかにした。続いて本項では第二波毎日登山について同様に言説分析を行っていく。

1927（大正15）年から1938（昭和13）年の第二波毎日登山は、第一波に比べ団体数が増加し、それに伴って全体の規模も拡大していた。登山団体のカテゴリー構成比から見ても、青年団系が全体の3割ほどに増え、登山者の社会階層も多様になっていた（第3図)。数値からも毎日登山が何らかの変化をしたことが分かるが、以下の言説にはそれまでは無か

った文脈で毎日登山が語られている。

「大詔煥発　国民の精神作興を宣らせたまふ」
朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニアリ、之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス、（中略）況ンヤ今次ノ災禍甚ダ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツヲヤ、（中略）宜しく教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥（しりぞ）ケテ質實剛健ニ趨（おもむ）キ輕佻詭劇ヲ矯（た）メテ醇和ヲ致シ、公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ尚ヒ、（中略）以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ、（以下略）

聖上陛下の大御心は我が神戸鶏鳴歩徒歩会が創立以来金森健治以下が真髄トシテ行ひ且普及して来た所の精神であります（中略）此の記念すべき大詔によりて我々は目醒て大いに活動せねばならん秋であります（下線は筆者）（『鶏鳴』，第 22 号，1923 年 12 月 1 日）

これは 1923（大正 12）年 12 月 1 日号の一面記事に大きく掲載された天皇の大詔煥発である。「今次ノ災禍甚ダ大ニシテ」とは関東大震災を指し、震災後の社会的混乱を鎮静するために出された。「浮華放縱ヲ斥（しりぞ）ケテ質實剛健ニ趨（おもむ）キ輕佻詭劇ヲ矯（た）メテ醇和ヲ致シ」は、大正デモクラシーなど思想的激動に対しての非難であり、「質実剛健」に立ち返り「國家興隆」を図れと国民を戒めている。その大詔煥発を受けて、神戸鶏鳴徒歩会は「創立以来金森健治以下が真髄トシテ行ひ且普及して来た所の精神であります」というように、自分たちの団体の精神あるいは意義に落とし込んでいる。同時期の神戸徒歩会『ペデスツリヤン』にはこの内容の記事は掲載されておらず、神戸鶏鳴徒歩会でもこの記事以降、毎日登山がこのような意義を持って語られることは、1930 年代後半までなくなる。しかし次の記事を皮切りに、再び世相に対し登山の意義を強調するような言説が現れる。それは、武器の発達は「徒歩力」「行軍力」を必要とし、毎日登山はその能力を身に着ける「銃後徒歩運動」として相応しいとする、神戸鶏鳴徒歩会会長の言葉である。

「行軍力と我等の使命　神戸鶏鳴徒歩会会長金森建治」
我々が新聞紙上に快速部隊とか陸の水雷等の言葉を見出す時、我が部隊の絶大な徒歩力がその影にある事に驚かざるを得ない。（中略）武器の発達は絶大の行軍力を要求される。（中略）従って漫然と山野を跋渉するよりも、そこに我が会が常に提唱する意義を持たせたならその興味は倍加し銃後徒歩運動として相応しいものに違ひない。（下線は筆者）（『鶏鳴』，第 162 号，1939 年 1 月）

それまでの記事と比べて「徒歩」が前面に押し出されている。1938（昭和 13）年 12 月頃から神戸鶏鳴徒歩会では、徒歩が軍事的な意義を持つとする文章が頻繁に掲載される。それは 1938（昭和 13）年 4 月に公布された「国家総動員法」に基づき、日本がいよいよ本格的な戦時体制に入ろうとする社会的情勢の影響を受けていると思われる。国家総動員法が 4 月に公布されてから、上の記事が出るまで 8 か月ほど期間が空いているのは、同年 7 月 3 日から 5 日にかけて、阪神大水害が起こったからであろう。六甲山や神戸の街が未曽有の被害を受けており、会報の紙面もそちらに大きく割かれていた。

一方その頃の神戸徒歩会はと言うと、神戸鶏鳴徒歩会のように登山の意義を直接、軍事的な部分に求めるような主旨の言説は見当たらない。1937（昭和 12）年の『ペデスツリヤン』には以下の記事が掲載されている。

最近体育文化の非常なる向上（殊にオリンピツクを転機として）に伴ひ電鉄新聞社等に依るハイキング熱は物凄い。趣味的方面では殊に植物採集に乗り出し其の真髄は絶賛の辞を以て迎えられる。スキーにしてもそうだ。大阪支部の方ではドシく内地のスキー場に満足せず北海道樺太へ進出して（中略）先端的方面では（中

略）氷壁を以て対象とする處まで技術が延びて来た。（下線は筆者）（『ペデスツリヤン』，第198号，1937年6月）

「体育文化」や「オリンピツク」[16]という言葉から、当時の国策の影響が見られるものの、内容としては登山の技術力向上や活動範囲の発展に重点が置かれている。その後、1940年（昭和15）に廃刊されるまで、第4図のように会報の表紙に「戰捷頌春　祝南京陥落」という言葉とともに国旗がデザインされている号もあるが、神戸鶏鳴徒歩会の「銃後徒歩運動」のような主旨の記事は存在しない。その要因としては、会全体の運営方針が毎日登山から離れつつあった可能性がある。例えば、上の記事に「内地のスキー場に満足せず北海道樺太へ進出して」とあるが、このころの神戸徒歩会はスキー例会参加人数が毎日登山参加人数の約3倍になっていた。六甲山に拠点を置きながらも、愛山協会に所属せず、独自の運営を行った神戸徒歩会は雪山登山やスキー、ロッククライミングなど本格的な登山をする団体へと変貌していた。したがって、戦争と結び付けられたのは近代登山の中でも特に、毎日登山であったということが分かる。次に体育史を押さえながら、毎日登山と当時の軍事情勢がどのように関係するのかを考察する。

第4図　『ペデスツリヤン』1938年1月号表紙
2019年11月20日，筆者撮影

1931（昭和6）年満州事変を機に日本は急激に戦時体制を強め、学校教育への国家的統制の強化と学校教育における武道の必修化が進められた（新井・榊原，2012）。戦争は強靭な肉体と精神力を持つ男子を必要とするため、心身の鍛錬に効果があるとされた運動や体操、スポーツ、武道は戦争に組み込まれていった。国家総動員体制が敷かれてからは、様々な国家政策が展開され、1938（昭和13）年には厚生省に体力局が設置された[17]。体力局はスポーツ団体の活動方針を「競技力向上」から「国民体力向上」へと変換させることを企図した事業を執り行い、体操大会や団体行進など、集団的体育行事[18]が多く実施されるようになった。このような時代背景の中で、徒歩と軍事の結び付きは、森の四国遍路に関する研究でも言及されている。森（2015）は、1930年代後半以降の日本の政治状況に応じて四国遍路では徒歩での巡礼が強調され、巡礼の思想が持つとされた質素倹約の精神や健康な身体は、国策に回収されるとした。毎日登山でも神戸鶏鳴徒歩会の言説にあったように、戦時色が濃くなるにつれて、政府のレトリックを利用しながら、登山の意義を軍事的理由に求めるようになっていった。また、政府側も登山による体力向上を促進しようとした。1938（昭和13）年10月には厚生省が徒歩運動指導者功労者として58人を表彰したが、そのうち2人を神戸市の登山団体（神戸鶏鳴徒歩会、神戸ヒヨコ登山会）所属の人物から選出した。つまり、非常時の中で毎日登山団体と国家政策はお互いに戦略的友好関係にあったとも言い換えられる。このような各種団体と、政府との関係は日本だけに見られるわけではない。同じ時期のドイツにおいても、ナチスと自然保護主義者たちが協力関係にあった。「ドイツの自然保護運動は非常に単純な政治哲学に基づいて行動したのだった。すなわち自分たちの目標に有利なものである限り、いかなる法的条項も、ナチス政権とのいかなる協調関係も問題なし」とユケッター（2015）は指摘する。

こうして軍事色の高まりと国家総動員体制のもと、体育やスポーツにも国家的統制が強化されていった。しかし、それ以前の日清・日露戦争終結後から、地域で自主的に発展してきた若者集団への国家統制が

始まっていた[19]。それは、義務教育終了後に中学校や師範学校に進学しなかった青年たちにも、国家主義的な教育を注入する機会が必要であったからである[20]。政府の影響力が強まるとともに、「青年団」という名称が全国的に広まり、各地の青年団では修身や教練的なものが重視された。剣道・柔道・弓術などの武道のほか退役軍人や小学校教員の指導の下で野球やテニスなどが実施されていた。つまり、青年団の統制を含む青年教育や体育教育は、対外戦争へ向かう国家政策と密接に関係していたのである。前節において認められた、第二波毎日登山における青年団系登山会の増加は、毎日登山が青年たちの強い精神と肉体を養成する場としてみなされていたとも解釈できる。

第一波毎日登山は新中間層により「健康」という価値が見いだされ、鶏鳴園での活動に表されるように、「趣味」としての側面を併せ持った。その文脈から郊外運動とのかかわりが明らかになり、毎日登山が阪神間モダニズムを要因の一つとして形成された可能性を示した。しかし、第二波毎日登山における「銃後徒歩運動」などの言葉や、青年団系登山会の増加からは、軍事的・政治的な時勢と結びついていく「修身」や「教練」としての毎日登山が見えてくる。この動きは、毎日登山だけにあったわけではない。1930 年から 40 年代にかけて、四国遍路やドイツの自然保護運動など同時代のあらゆるものが国家政策の統制下あるいは協力関係に置かれ、ナショナリズムなものに絡み取られていった。登山の特性上、徒歩というキーワードを持つ毎日登山も、その一例として存在していたのである。このように、毎日登山での身体運動に付与される価値は、「健康」「趣味」から「修身」「教練」へと約 30 年間で変化していった。

もっとも、第 2 表に示された毎日登山形成期（第一波毎日登山）の活動目的には、当初から多くの団体で「心身の練磨」「体育奨励」という表現が用いられている。また、『鶏鳴』の天皇の大詔煥発の言説も 1923（大正 12）年のもので、これも第二波の時期から外れている。これらは、青年団への統制が大正初期から始まっていたように、様々なものへの軍事的準備が 1930 年代後半に突如強化されたのではなく、明治政府の富国強兵から逐次進められてきたからだと言える。第一波・第二波毎日登山は、郊外運動あるいは軍事情勢を背景に持ちつつも、その境目はあいまいで重なり合っていることを注記しておきたい。

Ⅴ．結論

本稿では、明治末期から昭和 10 年代の六甲山登山を取り上げ、毎日登山団体の分析を通して、六甲山における近代登山の受容と定着のプロセスを示した。また定着していく際に、いつどのような主体により、登山の価値が発見されていくのか、その意味付けと社会状況との結びつきを検証した。第 2 章では近代登山史を概観し、研究対象である毎日登山が、大正時代から盛んに行われ始めた大衆登山に位置づけられることを確認した。第 3 章では外国人による六甲山のレジャー開発の系譜をたどり、H.E. ドーントらの週末レジャー登山が、日本人に受容される過程を追った。そして神戸徒歩会の初期の活動内容と居留地外国人らの週末レジャー登山を比較することで、海水浴などの近代スポーツの受容とは異なり、西洋型の週末レジャーをそのまま取り込み、その実践の中で毎日登山が形作られたことを明らかにした。第 4 章では成立後の毎日登山の変容を量的な観点と質的な観点から紐解いた。毎日登山団体の増加には 2 つの波があり、第一波毎日登山は郊外運動の影響下で、新中間層の登山者により「健康」という価値が付与された。加えて、「趣味」としての側面を持ち合わせるようになった。第二波毎日登山は戦争へと向かう社会状況において、国策と戦略的友好関係を保った。同時代の四国遍路がそうであったように、軍事における徒歩の優位性が強調され、青年団による毎日登山団体が増加し、「修身」「教練」として位置づけられた。

以上の知見から、近代登山は西洋文化の一つとして新中間層の人々に受容され、1910 年代から第二次世界大戦前まで、その意味付けを変えながら、多様な人々の間に定着していったと判明した。これに伴い、六甲山周辺に住まう人々の山への認識も、登山

と同様の変化をしたと考えられる。近世までは生活や宗教的行為のために限られた人が利用する場所であったのが、1910 年から 20 年代は新中間層の人々にとって、都会の汚染から逃れられる健康で清浄な場所、あるいは娯楽や趣味を行う空間へと変わった。魚や氷を運搬する道ではない「登山道」が、多額の資金を投資して張りめぐらされ、ステッキに半ズボン、リュックサックを背負った人々がカテージ[21]でコーヒーカップを手に団らんするようになった[22]。1930 年代後半からは、ますます登山人口を増やしつつも、毎日登山の徒歩性が一層強調された。それとともに六甲山は、軍事的意義に基づき心身を鍛える鍛練や修練の場となった。ただ悠然と自然の中を跋渉することよりも、「銃後徒歩運動」として体力や脚力を増強するための場であるという価値を与えられたのである。このように、毎日登山と同じく「山」という空間への認識も変容していった。

また本論では直接触れることができなかったが、毎日登山団体を束ねた愛山協会は六甲山の自然愛護活動にも積極的に取り組んでいた。はげ山[23]と化していた六甲山の植林などに積極的にかかわり、環境保全の理由から、自動車道路の開設反対の陳情書を神戸市に提出するなどしていた。これらの活動からは、近代の自然破壊の中で生まれる、自然保護の認識が六甲山にも向けられていたと言えるだろう。しかし、1942（昭和 17）年以降は戦局が悪化してゆき、神戸港を山上から見ることは軍の機密上から禁止され、毎日登山は衰退に向かった[24]。終戦後も社会混乱と生活物資の欠乏による困窮で、毎日登山は火の消えたような寂しさであったと言う（神戸レクリエーション協会, 1970）。そこで、戦災復興のための体力と不屈の精神を育成する目的で、1948（昭和 23）年 9 月に神戸市により神戸市民山の会が発足された。これは愛山協会のように、毎日登山を奨励し登山回数の記録と優秀登山者の表彰などを行う機関である。そして、1950 年代に起こった第一次登山ブームの追い風にも押され、毎日登山団体や茶屋が次々に復活し、戦前にも劣らない活気を取り戻していった。

同じころの高度経済成長期には、六甲山系の山から土砂を採取し臨海部を埋め立てるとともに、採取した跡地は住宅団地として造成する、いわゆる神戸方式の開発手法「山、海へ行く」のまちづくりが行われた。これは臨海工業用地の確保、港湾施設の整備、急増する人口のための住宅政策の 3 つ緊急課題を解決するためにとられた手段であったが、山が大きく削り取られ、海岸は広きにわたって自然海岸を失った。郊外運動や戦争という背景を受けての意味付けだけでなく、自然保護や開発の点から見ても、六甲山は様々な主体による矛盾や、利害得失の対立も抱えながら存在してきたと推測される。

本研究では変わりゆく六甲山、そして毎日登山を見つめてきた。しかし他方では、変わらない側面というのも確かに存在する。それは山に登り、汗をかくことの辛さ、六甲山から見下ろす景色やその爽快感、下山後に入る風呂やご飯の格別さである[25]。1932（昭和 7）年の『鶏鳴』にこのような文章がある。「高い處（ところ）に登つた時の氣持は何とも言へぬものであつて登らぬ者の想像もつかぬもので、よく山に登るとどこがよいかと質問する人があるがそれは羊羹を喰わずにどんな味がするかと云ふも同然である」。時代が移り、登山に見いだされる価値が変化しようとも、山に登った人だけが味わうことのできる気持ちは同じなのだろう。毎日登山にも現在、高齢化の波が押し寄せ、登山者数は年々減少しているという。神戸ヒヨコ登山会の現会長は「早朝に登る人ばかりではなくてね、皆好きな時間に登りよんですわ」と話し、最近では「毎日」登山よりも「山を楽しむ」ことが重要になったのだと語る。彼らは明治時代からずっと山を歩くことを楽しみ、毎日登山と六甲山の自然に誇りを持ち続けているのだ。

謝辞

最後になりましたが、本稿執筆にあたり、ご協力頂きました神戸登山研修所、神戸市文書館の方々へ深く感謝申し上げます。そしていつも親身に且つ的確なアドバイスをしてくださった藤田先生、原口先生、菊地先生をはじめ、大学の地理学教室の皆様に改めて心よりお礼申し上げます。

（あらたけ　きょうこ・神戸大学文学部地理学専修４回生）

参考文献

新井博・榊原浩晃編（2012）：『スポーツの歴史と文化　スポーツ史を学ぶ』，道和書院，200p.

井村仁(2006)：わが国における野外教育の源流をさぐる，野外教育研究 10(1)，pp.85-97.

卯田卓矢(2015)：比叡山における鉄道敷設と延暦寺，歴史地理学 57（3），pp.20-35.

内海和雄(2008)：オリンピックと資本主義社会 3 オリンピック招致と日本資本主義，人文・自然研究 2（4），pp.4-121.

小口千明(1985)：日本における海水浴の受容と明治期の海水浴，人文地理 37(3)，pp.215-229.

神戸市須磨区ホームページ
［http://www.city.kobe.lg.jp/ward/kuyakusho/suma/shoukai/sumanewtown/NThistory.html］，最終閲覧 2017 年 7 月 21 日

神戸市レクリエーション協会、神戸市民山の会編(1970)：『神戸背山登山史』，神戸レクリエーション協会，74p.

神戸徒歩会(1925-1943)：『ペデスツリヤン』，神戸徒歩会（関西徒歩会）第 77 号-第 265 号

佐藤大祐(2003)：明治・大正期におけるヨットの伝播と受容基盤，地理学評論 76（8），pp.599-615.

城谷寅一編(1923-1940)：『鶏鳴』，神戸鶏鳴徒歩会第 15 号-第 184 号

ダイヤモンド登山会(1936-1938)：『ダイヤモンドタイムス』，ダイヤモンド登山会

田中眞吾編(1988)：『六甲山の地理　その自然と暮らし』，神戸新聞出版センター，297p.

棚田真輔ほか(1984)：『プレイランド　六甲山史』，出版科学総合研究所，380p.

津田修二編纂(1978)：『毎日登山発祥の地善助茶屋』，神戸登山研修所，50p.

中島俊郎(2014)：ウォーキングの文化史 イギリス人はいかに歩き、何を生み出したか，甲南大学紀要文学編 164，pp.59-77.

布川欣一(2015)：『明解日本登山史』，ヤマケイ新書，269p.

「阪神間モダニズム」展実行委員会編著(1997)：『阪神間モダニズム 六甲山麓に花開いた文化、明治末期―昭和 15 年の軌跡』，淡交社，243p.

阪神電鉄(1914)：『郊外生活』，阪神電鉄，第 1 巻（4），70p.

兵庫県観光連盟編(1956)『国立公園六甲連山』，兵庫県観光連盟，64p.

平川知佳(2010)：階級と余暇の指向性 近代のイギリス社会に焦点をあてて，北海道大学 2009 年度修士論文，59p.

フランク・ユケッター（和田佐規子訳）(2015)：『ナチスと自然保護 景観美・アウトバーン・森林と狩猟』，築地書館，293p.

堀田弘司(1990)：『山への挑戦 登山用具は語る』，岩波新書，228p.

毎日登山クラブ編(2003)『神戸市民の毎日登山（その歴史と現状）』，毎日登山クラブ，33p.

南博編(1982)：『日本モダニズムの研究　思想・生活・文化』ブレーン出版，316p.

宮永孝(2005)：オールコック英公使：富士山に登ったヨーロッパ人第一号，社会志林 51（4），pp.139-174.

森正人(2015)：〈論説〉祈りの意味・物質・身体：四国遍路の政治学（特集：祈り），史林 98（1），pp.143-171.

山口廣編(1987)：『郊外住宅地の系譜 東京の田園ユートピア』，鹿島出版会，282p.

山と渓谷社(2001)：『ヤマケイ関西　ハイキングのメッカ、近代登山発祥の地六甲山』，山と渓谷社，200p.

林野庁ホームページ
［https://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/genkyou/h29/1.html］，最終閲覧 2020 年 1 月 6 日

渡辺融(1993)：中村敏雄編『スポーツ文化論シリーズ 1 スポーツの伝播・普及』，創文企画

---

1) 林野庁ホームページによる

2) 藤木九三（1887-1970）は登山家、ロック・クライミング・クラブの創始者。東京毎日新聞社、朝日新聞社に記者として勤務。

3) 「六甲山」は六甲山系全体を指す場合と、神戸市

東灘区に位置する六甲最高峰を指す場合があるが、本稿では前者の意味で使う。

[4] 毎日登山が固有と言えるのは、筆者が全国の都道府県立図書館に質問した結果、このような活動を団体単位で行っている、あるいは過去に行っていたのは六甲山だけだという回答を得たからである。

[5] 2 万 3 千回という記録は、1 日に 1 回として計算すると、63 年間毎日欠かさず登ることで達成される。

[6] 直訳すれば「神戸山羊倶楽部」であるが、先行研究の多くでは松村寿「神戸カモシカ倶楽部山日記」（『山岳研究』，第 26 号）にならい、このように訳している。

[7] 1873（明治 6）年 10 月 14 日から 1948（昭和 23）年 7 月 20 日までの間、1 月 5 日は新年宴會、2 月 11 日は紀元節、4 月 3 日は神武天皇祭であった。

[8] 初期の活動は遠足会や会報・地図・絵葉書の発行、山路の新設や修繕が行われていた。

[9] 日本銀行が記録している企業物価指数による計算。

[10]「各町内、各工場、會社等に青年會青年團があり、猶これを通貫統一する總合青年會がある樣に、神戸愛山協會は、これら多數の登山會を持つて一丸とした會であります」（『鶏鳴』，第 162 号，1938 年 12 月）

[11] 1918-23 年頃。第 3 章第 2 節を参照。

[13] 第 3 章第 2 節、本稿 5 頁参照。

[14] 表 6 の『住宅地御案内　如何なる土地を選ぶべきか・如何なる家屋に住むべきか』のこと。

[15] 沿線に園芸趣味を普及させ、郊外生活の真の充実を図ることを目的として発行された冊子。記事は阪神間に住む読者による寄稿で構成。創刊当初は紙面の半分ほどが園芸記事であったが、号を重ねるごとに寄稿者も園芸家、作家、医者、学者、主婦など層が広がり、話題も名所旧跡や、ペットの犬や小鳥、スポーツ、子育てと多岐にわたる。

[16] 第二次世界大戦前のオリンピックの招致理由は、当初は関東大震災からの東京復興であったが、招致活動の途中で「皇紀 2600 年」記念行事が付随し、政府の国際的孤立解消、皇国民イデオロギー高揚策として、国策化されていった（内海 2008：56）。

[17] 1935（昭和 10）年の徴兵検査の結果から、陸軍省が、男子の体力の低さを憂慮し、体力局が設置。厚生省は、国民体力の国家管理を着々と推し進め、1939（昭和 14）年には、15-25 歳の男子を対象に戦場での作業能力を測定する体力章検定を実施。

[18] 1938（昭和 13）年の明治神宮国民体育大会では、国防競技として手榴弾投げや武装競技が行われた。

[19] 1915（大正 4）年、「青年団体の指導発達に関する件」という訓令が内務大臣と文部大臣の連名で出される。陸軍大臣の名前はないが、この訓令による陸軍省への影響は大きく、青年の思想善導を図りたい内務省、徴兵前軍事教育を実施したい陸軍省、学校卒業後の青年教育の場として活用したい文部省の思惑が入り混じった訓令であった。1925（大正 14）年には、20 歳までの青年を対象に青年訓練所が設置された。青年訓練所は 4 年間で、教練 400 時間、修身・公民科 100 時間、普通科 200 時間、職業科 100 時間であった。

[20] 学校教育と戦時体制については、青年団に遅れること 1941（昭和 16）年に、国民学校令が公布された。小学校は国民学校となり、教育目的は、忠良なる皇国臣民を錬成することであった。体操科は鍛錬科と名称が変更。戦技訓練の場へと変質していった。「陸上競技」は「陸上運動」とされ、やがて、行軍、戦場運動、銃剣道、射撃などの戦技訓練が重視されるようになった。

[21] 神戸徒歩会は再度山に「シーダーカ（コ）テージ」という小屋を所有していた。ハイカラな籐家具が置かれ、署名所としても使われていた。

[22]「皆々半ズボンにステツキと云う格好で登るのであります。そして其コースの中途にある茶店でコーヒーを飲み、其處に備えてある名簿に署名して、其登山回數の多きを誇ると言ふ無邪氣な樂みの内に、此神戸市背山からの恩惠を滿喫して居るのであります。」（『鶏鳴』，第 162 号，1938 年 12 月）

[23] 植物学者の牧野富太郎は「私は瀬戸内海の海上から、六甲山の禿山を見てびっくりした。はじめは雪が積もっているのかと思った。土佐の山に禿山などは一つもないからであった。」という言葉で表した。

[24]「山の上には高射砲弾地が構築され、市民の自由な登山もままならず、山は子供達の心身を鍛える場所となり、中学生（旧制）の耐寒登山、マラソン、武道などの場となり、毎日登山という悠長なことは全く考えられなかった。」（毎日登山クラブ 2003：3）

[25]「登山の御蔭で昨年登り初めて以來大變食事がおいしく頂けましてなア」（『鶏鳴』，第 96 号，1933 年 5 月）